

『山陰文藝』57号原稿(2023. 5発行)

石見銀山の小説と詩

―何をどのように描くか―

洲浜 昌三

第一六八回芥川賞・直木賞が一月十九日に発表された。直木賞は小川哲著『地図と拳』と千早茜著『しろがねの葉』が受賞した。

『しろがねの葉』は、戦国末期の石見銀山を舞台に、少女ウメが過酷な環境や運命に抗い、自立していく姿を描いた長編小説。県内で本はすぐ売り切れ、図書館では予約三十日待ちという新聞報道もあった。

今は、本が売れず書店が町から消えていく時代である。経済的な豊かさが優先される時代の流れの中で、『しろがねの葉』は、精神的な文化である文学という観点からこの地方に光を投げかけた。小説の舞台になった石見銀山の町に住み創作活動をしてきた者として、喜びと共に深い感慨がある。



今回『しろがねの葉』直木賞受賞を機会に、石見銀山と創作」、特に小説と詩について考えてみた。

長い間、地域の歴史や文化に興味を持って資料を集め、小説や脚本や詩などを書いてきた。

「何のために書くのか」「何をどのように書くか」

この問題意識は常につきまとって離れない。特に地域をどのように書くか。これは大きな課題である。下手をすると観光案内物か自己満足物になりかねない。

平成十二年に、大田市演劇サークル劇研「空」を立ち上げた。そのとき次のような目標を掲げた。

「感動のある舞台の創造」「地域の歴史文化の掘り起こしと再創造」「独自性と普遍性の追求」

これは目標であり、脚本を書き舞台で演じて初めて意味を持つ。劇だけでなく、同時に詩や小説にも当てはまり、同じ問題意識を持って取り組んできた。

知らずに歩けば古びた過疎の町

石見銀山は、「銀山遺跡とその文化的景観」が評価され、アジアで初めて認定された鉱山の世界遺産である。

石見銀山へ行ったことがある人は、どんな印象を持って帰るのだろう。非常に広範囲なので総てを見ることは困難である。見た場所によって感想は様々だろう。

今まで多くの人を案内したが、カナダから来た友人は、街並が一番印象に残った、という。

何も知らずに、石見銀山を歩けば、「古びた過疎の町」という印象しか残らない。龍源寺間歩を歩いてても「暗くて長いトンネル」だろうし、石見銀山の中心にある仙ノ山に立つても「山しか見えない小高い山」だろう。

全国に廃鉱鉱山はたくさんある。しかし、多くの作家の手によって何度も小説の舞台になる廃鉱は数少ない。石見銀山は、同じ廃鉱でありながら、世界や日本の歴史の中で重要な役目を果たし、さらに銀を巡る数々の争奪戦、そこに生きる人々の人間模様、歴史や人の喜怒哀楽など、作家の想像や創造を喚起するものがたくさん埋蔵されている。見える人には見えないものが見えるのだ。

固有性と普遍性、そして描写

『しろがねの葉』を手にして、直木賞だから娯楽性や大衆性が高い小説だろうと思って読み始めた。しかし冒頭から意表を衝かれ異次元の世界へ運ばれた。

「常闇^{とこやみ}にいる。／＼は、山に幾百と穿^{うが}たれた間歩^{まぶ}の中なのか、生まれ落ちる前の胎内なのか。／それとも、この身に空いた穴を覗き込んでいるのか。／はじまりも終わりもない闇。」

繊細で感性豊か、凝縮した象徴詩のような文体に圧倒され引き込まれる。作者は新聞で次のように語っている。「現代ものではできない死と隣り合わせの性描写を描きたかった」「死があるからこそ生殖本能がある」「過酷な環境から逃げるのではなく、そこで生きた人々を通して、生について考えてほしい」



地域固有の石見銀山が舞台でありながら、目に見えない普遍性的な理念が貫かれている。

石見銀山を素材にして書かれた小説は二十編近くあるが、エンターテインメント性と物語性が強い小説がほとんどである。

しかし、この「しろがねの葉」は、銀山という過酷な男社会に一人の少女が身を置き、女性として如何にその壁を切り開いていくか、というテーマが背骨にある文学性の強い小説である。銀山も単なる物語の背景ではなく、主人公や登場人物と一体の存在である。何よりも感性豊かで、濃密、リアルでありながら象徴的で詩的な描写が血肉となつて独特の世界を創り出し、頭ではなく皮膚や

腹に伝わってくる。

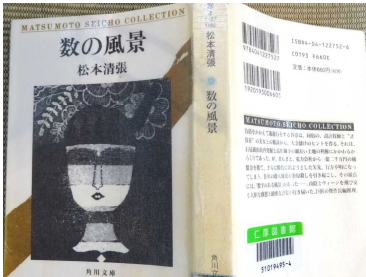
松江の詩人・田村さんは手紙の中で、「まえがきと結びとが、震えるほど詩であると断言したい」と書いて寄越された。同感である。精緻な具体の描写が同時に具体を超越した世界を象徴し、眼前に展開される石見銀山の営みと同時に読者は独自の世界をイメージしながら文字を追っている。まさに詩である。

松本清張『数の風景』はじめ石見銀山の小説

面白いことに、最近二年間に三冊、著名な作家が石見銀山を舞台にした小説を書き、刊行された。

『しろがねの葉』の前年に直木賞作家で多数の著作がある澤田瞳子の『輝山』、更に脚本家としても知られている土橋章宏の『いも殿様』である。

土橋氏は大田市民会館で講演し、多くの市民が聴講した。



著名な作家で、最初に石見銀山を舞台にした小説を書いて全国に紹介したのは松本清張だった。1986年週刊朝日に小説『歌のない歌集』を連載。その第一話「数の風景」に石見銀山が登場した。そ

の後、朝日新聞社、角川書店や光文社から本になって刊行されヒットした。

松本清張は、1986年に松江で開催された古代史のシンポジウムに参加した折に大森へきて中村ブレイスを創業した中村俊郎社長に会って色紙を手渡した。

中村社長は、大森町の発展に力を注ぎ、自ら貴重な歴史的資料を収集し、芸術文化の活動も積極的に支援し、石見銀山の活性化に献身的してきた第一人者である。当時、石見銀山に関心があった松本清張とも交流があった。色紙には次のように書かれていた。

「空想の翼で駆け現実の山野往かん」



この言葉は大きな石碑に刻まれ、中村ブレイスの前庭に置かれている。

目の前にある山や原野は、もの言わぬ荒涼とした山野だ。豊かな空想と創造の翼を持ってその山野を見れば、そこに人の営み、戦い、

生活、人々の喜怒哀楽等々、歴史や文化が見え、物語が生まれてくる。それは芸術や文学創造の原点である。石見銀山の山野にもそれがあるという示唆でもある。今から三十七年前、石見銀山が現在ほど注目されず、鉱山遺

跡が自然のまま山野に埋もれていた時代である。

参考までに、それ以前（2015～1990）に刊行された主な小説の題名と作家を新しい順に記しておく。



り、劇もある。

書棚にないので、仁万の図書館が特別展示した時に許可を得て背表紙を写したのが次の本である。



県内では、「山陰文藝」会員でもあった大田市の田中通『芋代官』、川本町の小笠原秀昱『大森哀愁浪漫』上下、三次市出身の小原一登『涙峠』がある。本にはなっていないが、本誌五十一

あさのあつこ『ゆらやみ』、

安部龍太郎『石見銀山ものがたり』、山本兼一『銀の島』、西村

京太郎『生死を分けた石見銀山』、梓林太郎『殺人鉾脈』、

半村良『大久保長安』、杉本苑

子『終焉』、斎藤吉見『大久保

長安』、堀和久『大久保長安』。

井戸平左衛門はこれ以外にもあ

る。

号まで七回連載された沢村俊介『石見銀山見回り同心控』がある。（沢村俊介はペンネーム、大田市出身）



小説以外では石見銀山の記録や評論、解説本、論文は多くの研究者、郷土史家によって書かれ刊行されている。

書棚には郷土の研究者などが執筆した本がたくさんある。参考までに写してみた。

地方であり世界的存在

今年は宮沢賢治没後九十年、『春と修羅』発行百年目に当たる。それを記念して、日本現代詩歌文学館では、三月中旬から一年間、「賢治に献ずる詩歌」展を計画している。岩手県北上市にあり、明治以降の詩歌や書籍、研究書、雑誌など、有名・無名を問わずに収集、保存している。全国の同人雑誌も積極的に収集して閲覧に供している日本唯一の詩歌文学館である。

昨年末、作品揮毫依頼がきた。色紙か原稿用紙一枚の詩歌、短文、写真、朗読音声データの依頼である。開館当初には色紙の依頼があり、2021年には『大震災と詩歌―あの日から明日へ』刊行に際し指名された詩を

送ったことがある。

今回、何を書くか悩んだ。何しろ、詩を献じる相手は、大詩人、宮沢賢治である。正月が過ぎ、べ切の一月末が目前。ギブアップを決断しかけたとき、ふと入澤康夫の言葉が浮上し蘇った。

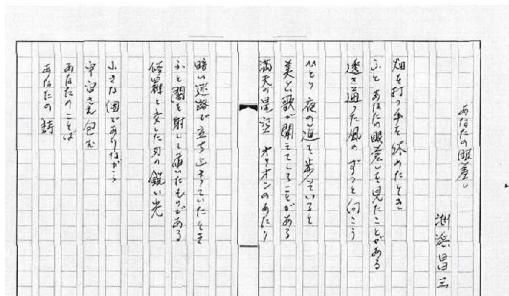
「賢治の作品は東北の田舎が舞台でありながら、同時に世界的な存在である」

洲浜昌三

すはま しょうざう



詩人で賢治の研究家でもあった入澤康夫さんの言葉が忘れられない。「賢治の作品は独自の個でありながら同時に普遍的存在です」「地方であり世界的です」創作する時、いつもその言葉と賢治の作品を考えると、も身近なのに遠い。眼差しを見たのに風



入澤康夫

は松江の出
身でフラン
ス文学者で
もあり詩人
でもあつ
た。H賞は
じめ十指に
余る詩人賞

を受賞し、出雲風土記を素材にした詩集『わが出雲・わが鎮魂』は読売文学賞を受賞、オペラにもなった。サイン入りの詩集とプロが舞台発表したテープを受贈したこともある。難解な詩だが、群読してみたいという夢が今もある。2001年には島根に講師に招き「風土と文学」という題でシンポジウムを開催した。その後も「囲む

会」を田村のり子の企画で数人が集まったこともある。残念なことに2018年に八十六歳で他界された。

長年、宮沢賢治の研究者でもあった入澤康夫の言葉は、印象に残り、深く記憶に沈殿していた。

あなたの眼差し（宮沢賢治に献ずる詩）

烟を打つ手を休めたとき

ふと あなたの眼差しを見たことがある

透き通った風のずっと向こう

ひとり夜の道を歩いていると

美しい歌が聞こえてくることがある

満点の星空 オリオンのあたり

暗い迷路で立ち止まっていたとき

ふと闇を射して届いたものがある

修羅と交わした刃の鋭い光

小さな個でありながら

宇宙さえ包む

あなたのことば

あなたの詩

入沢康夫の詩論にこんな言葉がある。

「詩の役割の核心は作者の心境、感想などの個人的あるいは日常的事実を述べ伝えることではなくて、事実を越えた事実を持って、感動を読者の心に生み出すところにある」

歳と共に感性は衰える。感覚や情緒、情念、抽象より、客観的な事実を重視する傾向が強くなる。同時に認識や技法、方法論も深化しなければ創作は行き詰まる。

今までに五十篇近い地域の風物詩を書き、石見銀山を素材にした詩が二十篇近くある。その中の二編。

石見銀山 五百羅漢 洲浜昌三

石の反り橋を渡ると

羅漢さまの静かな岩室がある

父や母や 夫や妻や 愛しい我が子が
安らかに眠りますように

はるか江戸時代に 人々が込めた
深い祈りの石仏

羅漢とは――
いつさいの煩悩を滅し、自力で悟りを開いた人――
と辞書にある

それにしては

「てめえらあ それでええんかや！」

と目をむいて怒鳴る羅漢

「うちの ようぼうのやつがのう」

口を曲げて愚痴をこぼす羅漢

「助けちゃんさい 頼むけえ」

天に号泣する羅漢

「わしゃ はあ知らんで」

膝を深く抱える羅漢

「ありや ぼけてきたかいのう」

ふと 頭に手をやる羅漢

静かに瞑想する数多の尊者の中に
悟りとは遠い数体の羅漢

石見の国 福光の石工は
うっかり本音を刻んだのかもしれない

発見と喜び、広がるイメージや風景、想像――それは
詩の要素の一部だと思う。ユーモアも同様だと思う。

現在、日本といえば東京である。400年前、ヨーロッパの人々にとって、日本といえば石見銀山だったかも

しれない。当時のポルトガルの日本地図には、石見の位置に「銀山東京など地図では白紙、空白である。

ポルトガル生まれのカルロス夫妻を我が家に泊めて三瓶や石見銀山を案内した。今までにない視点に遭遇して、固定観念や常識がひっくり返される驚きや、そこから広がるイメージは、発見と同様に詩の要素だろう。

石見は何もない空白地帯

洲浜昌三

―石見銀山考―

遠いフランスから はるばる石見の我が家へ

カルロス夫妻がやってきた

カルロスは 陽気でたくましい赤ら顔のラテン系

若いとき日本のミノルタカメラが欲しくて

ドイツまで稼ぎに行った というカメラ狂

フランスで手にした日本観光地図では

この辺りは空白で 何も書いてないという

三瓶山から 刻々変わる日本海に沈む夕日を連写し

火山で埋もれた四千年前の縄文杉にシャッターを切り

山裾の露天温泉に身を浮かべて 浮世を忘れ

ヴェリイ グッド と我が妻の日本料理と酒を味わい

タタミマットの上のセンバイフトンで熟睡し

江戸風情の大森の街中を 秋風に打たれて共に走り

石見銀山世界遺産センターのヒノキのホールを抜け

輝く銀貨を眺め 銀山争奪戦絵図の前を過ぎたとき

突然 カルロスが大声を上げた

This map is Portuguese!

ヴァスコ・ダ・ガマに出会ったかの如く興奮し

日本地図「AS MINAS DA PRATA」を見つめつつ

大航海時代 世界の銀の三分の一を産出し

石見はヨーロッパの「銀鉱山王国」だったのだ

カルロスの生誕地は ポルトガルだった

英語の教師だったが 当時戦争を嫌って故郷を脱出

芸術の都 パリへ移ったという

何もなかった石見の空白地帯から

生まれ育った遠い故郷を

じつと見つめている

創作は、人の心、精神の記録であり、その時代、その地域の生きた精神的記録でもある。

「しろがねの葉」に触発され、地域の詩や小説の創作について、日頃考えていた一端を書いて見た。地方からも豊かな作品が生まれることを楽しみにしている。

（石見銀山の詩は詩集『春の残像』より。文中敬称は省略しました。

原文に少し手を入れて写真を挿入しました）